学術的社会調査研究に知的な発見の喜びを

巻頭言

関西学院大学社会学部教授　盛山 和夫

今日，社会調査が様々な問題に直面していることは周知の事実だが，どちらかといえば調査環境の悪化といったいわば外的な問題に焦点が当たっていて，社会調査データを収集して学術的に分析する側に潜む問題については，論じられることが少ない。むしろ最近では，ビッグデータがらみで統計学への関心が高まったり，それ以前から行動経済学や社会疫学などの広範な学問分野が社会調査に参入してきたりして，社会調査に関わる学術研究は総じて発展しているという感覚が強いかもしれない。

しかし，そうしたいわば量的な発展があるにもかかわらず，今日の学術的社会調査研究からは「知的な発見の喜び」があまりにも少なくなっているのではないだろうか。もしそうだとすれば，研究の「意義」を専門分野の外に向かって訴える力も弱いことになる。その結果，市井の人からみたら，学術的社会調査研究は単なる好事家のもので，わざわざそれに協力する意味はなくなってしまう。さらには，自然科学など他の学問分野と競合して研究費やポストを獲得しようとする際にも，明らかに弱い立場に置かれることになる。

「知的な発見の喜び」が衰えている１つの理由は，学術的社会調査研究が，より「精緻な」データを収集してより「高度な」分析を行うことには熱心であるものの，学問として引き受けるべき「大きな問い」への関心を失ってきていることにあるだろう。語弊があるかもしれないが，マルチレベル分析のような複雑な分析手法の流行にはそうした雰囲気が感じられる。むろん，新しい分析手法を開発したり試みたりすることは，学問の発展の基盤を形成するものだから，当然，推奨されなければならない。それに，専門分化や業績競争が激しくなれば，どうしても新しい手法への関心が高まらざるをえないだろう。

しかし，競争を通じての「進化」はしばしば「局地的適応」にとどまる。（似た言葉だが違う意味の）「マルチレベル淘汰」の概念を援用すると，もしかしたら，当該専門分野の内部で働いている（個人レベルの）淘汰圧力は，当該専門分野そのものの（群としての）適応性を損ねているかもしれないのである。とくに人文社会科学系の場合，実証的な「事実」とみなされるものは決して「物質的に客観的なもの」ではなく，時代と文化さらには測定方法にまみれたもの，言い換えれば「意味的なもの」なので，それ自体が「学問上の文脈」に大きく依存している。そのため，研究の「内閉化」が生まれやすい。

学問の発展はどこかで既存の文脈の打破・革新と関係しており，そこにこそ「知的な発見の喜び」がある。それは，単に事実を提示するだけでなく，見い出された事実に「どんな意味があるか」を問い直し，そこから「新しい文脈」を提示することになるような探求であるだろう。学術的社会調査研究にも，そうした探求を期待したい。